

文化はいかに情動をつくるのか——人と人のあいだの心理学

文化はいかに情動をつくるのか
目次

Batja Mesquita, Ph.D.
BETWEEN US
How Cultures Create Emotions

Copyright © 2022 by Batja Mesquita.
All rights reserved.

Japanese translation rights arranged with Batja Mesquita
through Brockman Inc., New York.

第1章 ロスト・イン・トランスレーション — 015

誰の情動も文化の影響を受けている

研究者としての情動理解の道のり

情動の仮定義

心の奥底では情動は同じなのか？

第2章 ふたつの情動 — MINE型とOURS型 — 045

個人の内部か外部か

心か人間関係か — 感情が行動か

本質か状況か — インサイド・アウトかアウトサイド・インか

MINE型かOURS型か

第3章 子どもの育てかた — 089

自分自身を快く感じる子どもを育てる

恥を知る子どもを育てる
怖れを知る子どもを育てる
共感に溢れる子どもを育てる
穏やかな(あるいは感情的な)子どもを育てる
怒りっぽい子どもを育てる
情動はMINE型であると同時にOURS型でもある

第4章 「正しい」情動と「間違った」情動 — 127

怒り

怒りと権力の正当性

怒りがたどる道筋

恥

恥がたどる道筋

第5章 絆を結ぶ、快く感じる — 167

愛

緊密な相互依存関係において生じる他の情動

幸福

幸福を望まない人などいるのか？

もうひとつの快い感情——穏やかさ
その他の快い感情——人間関係にまつわる幸福
愛と幸福

第6章

情動を表わす言葉の多様性—— 203

情動語

文化的なエピソード

類似の情動概念？

行動を促す言葉

概念の欠如

他者に影響を及ぼす

社会のストーリー

第7章

ワルツを学ぶ—— 241

新たな文化

情動を学ぶ

新たな概念

タンゴとワルツ

異なる文脈にみんなうまく対処できている？

第8章

多文化社会を生きるための情動理解—— 277

共感を超えて

文化的能力から謙虚さへ

情動エピソードをひもとくための道具箱

文化的に多様な教育現場における情動リテラシー

心の奥底ではみんなの情動は同じなのか？

あとがき—— 309

謝辞—— 314

解説 唐澤真弓—— 319

訳者あとがき 高橋洋—— 327

註—— 375

索引—— 381

・本文中の行間の数字は著者による註で、章ごとに番号を付し巻末に収録する。
・「」は訳者による註を示す。

私が心理学者になったのは、人々が何を感じているのかに興味があったからだ。人々の内面生活を理解し、何が人を怒らせるのかを知りたかった。情動に対する関心が生まれた経緯を振り返ってみることは容易ではないが、育った背景も関係していると思う。私はオランダで暮らすユダヤ人の家庭で生まれ、両親は身を隠してホロコーストを生き延びた。子どものころから「人の心」に関心があり、親がどう感じているのかをつねに見極めようとしていた。親の情動の起源は、たいてい私の眼前の状況にはなく、遠い（あるいはそう遠くはない）過去のできごとに関係していた。そこでは絶望が待ち受け、排除や差別による傷心がわだかまっていた。思春期の私の反抗心は、それが軽いものであっても両親の傷ついた心や悲嘆に触れ、文化や宗教に対する反抗的な態度は、父からは敬意のなさ、あるいは悪くすると愛情の欠如ととられた。

心のなかでも特に情動に関心を持つようになったきっかけは、人間がときに爆発しかねない情動を心の奥底に秘めていると感じていたことにある。情動を個人の内にある心理プロセスと見なすことは簡単だった。というのも私が出会った人々の多くは、現状や人間関係の悪さとは裏腹に芯がしつかりしているように見えたからだ。子どものころは、精神的苦痛を訴える人々を助ける精神科医や臨床心理士になりたかった。患者を内部から変えることで、情動も変えられるだろうと思いついていた。

深い内面生活の一部として情動をとらえる私の見方は、私が属する文化圏が感情（本書における感情は、情動の働きのうち、それがいかに本人に感じられるかという主観的、内面的な側面を指す）に焦点を絞る立場であったため、たやすかった。一九六〇年代から七〇年代にかけて、西洋の（Western）、教育を受け（Educated）、産業化された（Industrialized）、裕福で（Rich）、民主的な（Democratic）、いわゆるWEIRD文化圏には、感情の解放の時代が到来していた。真正さと選択の自由が当時の風潮を支配し、真に自分が何を感じ、何を望んでいるのかを知ることが重要だとされていた。内面が生活様式を規定していると考えられ、精神や情動の探究が重要視された。なぜなら、それによってよりよい選択が可能になると考えられていたからだ。内面に焦点が絞られていたのである。WEIRD文化においては、私と同世代の研究者の多くは制度的な規則に疑問を呈し、個人の感情や嗜好を中心に据えた。私も精神的探究に勤しんだことがあるし、若いころは自己の内面を対象に情動のプロセスを探究していた。

私は情動研究者として三〇年を過ごすうち、さまざまな文化との出会いを通じて、情動にまつわる問いの答えの多くが内面ではなく、社会的な文脈にあることに気づくようになった。私は情動研究を、アムステルダム大学のニコ・H・フライダ教授の指導のもとで始めた。当時のフライダ教授は、彼の名を世に知らしめた著書『情動（The Emotions）』を書き終えたところだった。この本は情動心理学の一里塚となり、神経科学から哲学に至るさまざまな分野をカバーしていた。だが、文化への言及は不十分だった。彼の指導のもとで一九八七年から執筆し始めた私の論文は、その間隙を埋めることを意図していた。私は、心理学、人類学、社会学、哲学における文化と情動に関する既存の研究を調査し、一九九二年に（ニコ・フライダ教授との共著）論文を発表した。この論文は、文化と情動に関する心理学

研究の分水嶺になり、普遍性が中心だった研究の流れを、文化的な差異も考慮する方向へと変えた。⁴ そしてこの論文の発表によって、私は、文化と情動の「相互構成過程」に関心を持つ、情動の文化心理学者としての地位を築いたのである。

私は研究の焦点を社会・文化的視点に移していったが、移民、あるいは一時滞在者としての私の個人的な経験も同じ経緯をたどった。一九九〇年代前半、私は生まれ育った自分の安全圏から離れてオランダ国外に移り、そこで研究を始めた。イタリアで二年間暮らし、内戦で引き裂かれたボスニアでユニセフの心理士として六か月間働き、最後にアメリカに渡ったのだ。私は博士^{ポスドク}研究員として、文化と認知に関するプログラムに参加した。ミシガン大学に設置されたこのプログラムは、文化心理学と呼ばれる新興の学際的な分野の中核をなしていた。その後私は、ノースカロライナ州のウェイク・フォレスト大学の准教授に就任した。そこで一〇年ほど教鞭をとったのちの二〇〇七年、私はヨーロッパに戻った。ベルギーは大西洋を隔てたアメリカではオランダに近いと思われるかもしれないが、文化的にはオランダとはかなり異なる。馴染みのアムステルダムから外に出て他の文化圏で暮らしたことは、情動が文化に結びついていることを実体験するよい機会になった。不慣れた環境で暮らすことで、私の情動は、それまで思い込んでいたように普遍的な既定値^{デフォルト}ではなく、文化が築き上げたものだという事実が明らかになったのだ。私の情動は、私の属する文化が形成したものであって、母国で重視されているタイプの人間関係を円滑に築くための、すぐれた通貨として機能した。そしてこれによって、私はオランダ文化圏でうまくやっていくことができた。しかし私の情動は、他の環境下ではそれほど有用ではなかった。その経験を通じて、私は内部〔内面〕から外部〔環境、文化、社会〕へ

と研究対象を移すことができた。つまり自己の情動を外部と呼応しながら追跡し、私が暮らす文化的、社会的環境のもとで通用している価値観や目標や実践様式に目を向けるようになったのである。

また私は、情動に関する問いの答えを外部に見出すようになっていった。なぜなら、そのほうが多くの文化圏で暮らす人々の考えに近いからだ。私は日本、韓国、トルコ、メキシコで、さらにはこれらの国々の出身で現在はアメリカ、オランダ、ベルギーで暮らしている移民を対象に研究を行なってきた。彼らの多くは、内面の感情を強調することなく人と人のあいだで生じるものとして情動的なできごとを語る。この事実は、外部に生じる情動を追跡すべきもうひとつの理由になる。

私は本書で、人間の情動に関して、従来とは劇的に異なる見方を提起する。その見方では、私たちの情動は、社会におけるその人の立場、人間関係、自分が属している文化的、社会的な文脈に結びつけてとらえることができる。また自分が暮らす共同体^{コミュニティ}の一員として私たちが社会に関与させる。そして本書は、情動が「私のもの(MINE)」であるとともに「私たちのもの(OURS)」でもあることを示す〔以後対応する情動を「MINE型情動(モデル)」「OURS型情動(モデル)」と訳す。モデルがつく場合は、情動それ自体より情動をとらえる見方を指す〕。

この見方を取れば、自己や他者の情動に関する理解が深まり、あなたも豊かな情動生活を送れるようになるはずだ。また、さまざまなありかたで感情が私たちが社会的な存在にし、他者と結びつけていることが明確に理解できるだろう。なおOURS型情動モデルは、MINE型情動モデルを置き換える、または対立するものとしてとらえるのではなく、相互に補強するという点は忘れてはならない。

おそらくもつとも重要なのは、O U R S型情動モデルが、文化、ジェンダー、世代、民族、人種、社会経済的諸階層のあいだ、さらには（私の両親と私のように）異なる経歴を持つ個人のあいだに横たわる情動の相違を理解し、多様な社会を生きていくための道具を提供してくれるという点だ。今日ほど、そのような理解が求められている時代はないだろう。社会がますます多文化化しつつある今日、企業、学校、法廷、医療健康施設は、異なる集団や文化が一堂に会する拠点になりつつある。情動は、文化の異なる人々が出会う場所で流通する通貨として機能するが、誰もが同じ通貨を用いているわけではない。いかに情動が、各人が属する文化圏や社会に結びついているかを理解することは、人と人が敬意を持って接し合い、他者の情動に共感を寄せることを可能にする。

本書は、異なる集団や文化圏に属する人々同士の間での齟齬や対立を解消するのに役立つはずだ。本書を執筆した私の動機が、欧米や他の地域におけるナショナリズム、排外主義、白人至上主義、人種差別主義、宗教的不寛容の蔓延に対する懸念によって強められていることは否定できない。しかしそれに加え、善意——多文化を包摂する人間でありたいという善意——に基づく人々のなかには、「他の集団や文化圏に属する人々は、私たちのものとは異なる情動を持つ」という主張が、それらの人々の人間性を否定することに等しいと信じるケースがあるからでもある。あなたもそう信じているのであれば、その考えが間違っていることを、私は本書を通じて説得したい。

私は本書で、自分がたどった研究の道のりを追体験できるようあなたを導く。さまざまな文化のもとで暮らし、情動研究を行なうことで私が経験してきた発見や驚きをあなたと共有し、かつて私が見落としていた点についても振り返るつもりだ。第1章は、研究者であり移民でもある私の経験を取り上げ、情動研究における私の立ち位置を明確にしていく。第2章では、M I N E型情動とO U R S型情動の違いを探究し、現代の心理学研究で中心的な情動の心理構造を、世界的にはより一般的に見られるO U R S型情動と比較する。そしてM I N E型情動もO U R S型情動も、概念上のみならず、情動の実践様式（情動を「経験」するありかた）としてもリアルなものだという点を明らかにしていく。

それに続く四つの章では、情動を文化的、社会的な文脈へと、より外的環境に視点を置いた研究を検討していく。第3章は、いかに子どもたちが、情動の社会化を通じて文化圏の一員になっていくかを示す。保護者はより広い社会環境の支援を受けて、文化に適応して「正しい」情動を実践できるように「情動の実践」という言いかたは一般的ではないが、著者は本書で実際に「do emotion」あるうは「do + 特定の情動」という表現を多用している。これは、以後の説明にあるように、「人と人のあいだで生じ、そのときの状況に応じて調節される一種の行為」を含んだものとして情動をとらえるO U R S型情動モデルを著者が重視していること（の反映と見なせる）、つまり共有されている目標や価値観を持てるよう早い時期から子どもに教えていく。第4章と第5章では、情動が日々のやり取り、人間関係、文化の特異性に応じてさまざまな経路をたどりうることを示す。一般に信じられているところとは違って、「怒り」「恥」「愛情」「喜び」などの情動は、何らかの普遍的なしるしを帯びているわけではなく、情動経験やその表現、それに関連する生理的、神経的な反応のパターン、道徳的、社会的な意義は、特定の状況、個人、人間関係、そしてもちろん文化の相違によって異なってくる。第6章は情動語を取り上げる。情動語とは、同じ集団、コミュニティ、文化圏に属するメンバー同士が、互いに共有する現実について伝え合うことを可能

にする言葉だ。しかしそれは、個々の社会集団の垣根を越えてコミュニケーションを図る場合には、なまくらな道具にならざるを得ない。情動語の使用は、特定の情動経験（以後、experienceはカナ書きとする。）「インスタンス」についての詳細は訳者あとがきを参照」を、同じ言葉を話す人々が共有している集合的な経験と結びつけることを意味する。それは、情動が私たちを自文化圏の一員にするもうひとつの方法なのである。

情動が私たちをコミュニティーと結びつけるありかたを理解すれば、いかに情動が、異文化コミュニケーションの際の障壁になるかがわかるはずだ。他者にとつての現実を知るためには、言葉の翻訳以上の何かが必要とされる。第7章は、異文化の情動を学ぶことに関する研究を取り上げる。幸いにも異文化の情動を学ぶことは可能である。とはいえ情動の実践という面で、移民と元来そこで暮らしている人々の差異がなくなるまでには一世代以上かかりうる。最終章は、O U R S型情動モデルの採用が、文化の垣根を越えて接し合い、共通の基盤を見出せるようになるための第一歩になりうることを示す。文化（や地位や階級や宗教など）の垣根を越えてコミュニケーションを図ろうとすると情動が妨げになる場合もあるが、O U R S型情動モデルは、情動の相違を理解するのに役立ち、異文化の価値観や優先事項を垣間見るための窓を提供してくれる。情動を理解し、それに基づいて行動するさまざまな方法を伝え合うことは、同じ人間同士として他者と接することにもつながる。なぜならそれによって、私たちの一人ひとりが社会的な関係の一部であり、それを作り上げていることを理解できるよ
うになるからだ。

「へこころ」はどこにありますか?」——授業の初回で問うと、頭か胸、だれもがこのいずれかを指します。へこころ」は脳の働き、思考や認知だと考えた人は頭を、意識の前に起こる身体反応の情動を思い起こした人は胸を指したことでしよう。

本書の著者バチャ・メスキータの回答は、このどちらでもありません。彼女はこの問いに、「人と人のあいだ」と答えます。社会での経験や知識、人とのコミュニケーションを通してへこころ」がくりあげられていくプロセスを、O U R S 型情動モデルとして、本書で提唱しました。

メスキータは社会心理学者で、なかでも情動研究のエキスパートであり、文化心理学の先駆者です。フロレンタイアしかし、本書ではその専門性に閉じこもることなく、発達心理学、異文化コミュニケーションや文化人類学、比較教育学といった近接する人文・社会科学の広範な研究を概観し、多くの知見を取り込んで、本書を書き上げました。

また、興味深いのは、感情心理学の基礎から構築した自らの研究業績を、自身の異文化体験から検証していったことです。研究者は、研究結果を先行研究に照らし合わせて、分野内での研究の妥当性や信頼性を問いますが、その研究成果が私たちの日常的現実をどのくらい説明できるかを忘れがちです。メスキータは本書のなかで、研究者自身のもつ偏見バイアスを疑うことによつて情動概念を再構成し、人

と人のあいだで生じる情動を示したのです。

一九世紀後半、情動は、多くの社会・行動科学研究者を魅了しました。ダーウィンしかり、有名な一節「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのか」を著したウィリアム・ジェームズしかり。一九六〇年代にダーウィンを継承したエクマンの基礎感情理論、ラザルス・サイアンス論争も大きな話題となりました。近年発展した脳科学では、認知や情動機能と社会を統合する社会脳が注目され、EQ（情動知性）に代表される感情制御と理解の能力は、子どもの成長、および社会で要求される能力として話題となりました。しかしながら、これらの研究の中心は、内省に始まった心理学の域を越えることはなく、情動は個人の内側にあるものとして分析を続けてきたのです。

行動に心を読む学習心理学、心をコンピュータに例えた認知心理学、自己分析を扱う臨床心理学でも、ほとんどの研究が自己の内側にある（こころ）を扱ってきました。社会認知など、心と社会との関連を求める社会心理学においても、自己の外部にある環境の重要性を問う発達心理学でさえも、情動は自己の内側にあり、外部はその内部に影響を与える要因として捉えられてきました。

一九八〇年代に始まる文化心理学の登場は、その転換期に大きな影響を与えました。

文化心理学は、（こころ）が社会・文化に開かれた実体であり、外部にある社会・文化との対話を^{ダイアローグ}通じて心理が構成されていくプロセスに着目します。中心的な役割を果たした「文化的自己観（Cultural Construal of the Self）」という理論は、日常経験の総体である文化が異なれば、自己のありかたが異なることを提示しました。私たちは経験を通して自己を生成し、その自己はまた、人々の経験の総体であ

る文化をつくりだしていくのです。したがって、文化、つまり日常経験が異なれば別の自己がつけられていくこととなります。東洋と西洋を大局的に論じたこの「文化的自己観」の提唱者ヘーゼル・マーカーと北山忍と共に、文化心理学を牽引してきたバチャ・メスキータが、本書で展開するOURS型情動モデルは、日常経験のなかで構築されていく情動のしくみを説明したものであり、そしてここに、文化心理学のエッセンスが凝縮されているのです。

さて、本書『文化はいかに情動をつくるのか』に収められたエッセンスとは、主に以下の三つです。

- ・情動の文化普遍性へのアンチテーゼである
- ・情動は日常経験から構成される。そして人々の日常経験が文化をつくりだし、維持している
- ・情動の社会性を追究することは、分断ではなく共生をもたらし、多文化共生社会で有効な方略を提案している

ひとつめの「情動の文化普遍性へのアンチテーゼ」は、第1章と2章で説明されています。

情動は生理的反応を含むために、人間に普遍的に共通する心理構造をもつとされてきました。しかし異文化に触れると、自己の内に生じた情動が意味をなさない場合があります。これを自身の失敗例で見てください。

英語を学びはじめてすぐ教わる会話に、How are you? があります。これに対して I'm fine. と回答す

ることを皆さんも学んだことでしょう。ミシガン大学での生活にも慣れたころ、私は前の晩、暑さで眠れず、体のだるさを感じていたので、研究室仲間のHow are you?に對し「I'm not fine, I do not feel well」と答えたのです。友人は「Okay, take care!」と心配そうな顔をして部屋を出ていきました。その昼、いつになく研究室のみんなが一緒になって私をランチに誘い出してくれました。いつもは速いテンポで会話が展開していくのですが、そのときはつたない私の英語をじっくり聴いていたのです。どうやら、私の何気ない回答は、「マユミはホームシックなのかも。大変だ!」と、研究室の仲間を動揺させたに違いありません。日本では「ちよつと疲れた」と答えることはよくありますが、アメリカの日常的な会話ではスクリプトにない、レアな回答でした。そのとき私は、「同じ感情を同じように共有することはできないのか」と、そのズレに気づかされたのです。

メスキータは、同じように、違和感を覚えた経験から、情動には多様な道筋があることを説明していきます。

第1章では、WEIRD文化圏（九頁参照）で発展してきた心理学と、その研究者が持つバイアスへの気づきを指摘し、心理学の理論を基盤とした文化比較研究の限界を述べています。続く第2章では、これまでのMINE型の情動に加えて、「人と人のあいだで生じる」情動としてのOURS型の情動があることを検証しています。

次に、第3章と4章では「情動は日常経験から構成される。そして人々の日常経験が総じて文化をつくりだし、維持している」ことが説明されています。

第3章では、文化化、社会化していく子どもの事例を通して、文化的価値に沿った情動や行動を明示的または暗示的に「大人」が伝え、子どもはそれを達成することを通して文化に受容されていく姿を描いています。

第4章では、社会規範に対応する情動の正誤を扱っています。先の私の失敗例にあるように、文化に沿った、つまり「正しい」情動であるIm fineは日常生活のスクリプトに採用され、多くの人々に共有されていきますが、一方のIm not fineは「間違った」情動として日常生活のスクリプトでは使われなくなり、言わないほうがよいこととなって、消滅していくのです。

第5章では、WEIRD文化においても関係性に生起する情動として、愛や幸福を取り上げ、「文化差」が発見されることを指摘しています。同じ情動であっても、どんなときに生起するのか、どのように表現するのかということは、文化によって異なるのです。

続く第6章では、情動理解における言語の役割とその多様性をまとめられています。言語が同じであれば同じ情動となるわけではないことが、基礎感情（喜び、悲しみ、怒りなど）においても明らかです。たとえば、頻出する基礎感情語Happyの和訳について、日本語では「しあわせ」「幸福」などと訳すのが妥当でしょう。しかしながら、多くのケースでは「喜び」のほうが適切な情動語であると判断するに至りました。

英語のhappyはjoyとwellbeingを含み、日本語の「しあわせ」では、そのふたつは別の心理状態と考えられるからです。メスキータは、英語をオランダ語に翻訳する際にも同じ問題があったことを私信で教えてくれました。Im fineはIm happyな状態であり、アメリカ人にとっては頻繁に経験する

情動と考えられ、基礎感情語とされてきました。しかし happy が示す情動状態は一義的でなく、異なる文化では重なりはあるものの、同義とはなりません。これはむしろかしいところですが、happy が基礎感情語とされていることは欧米圏の研究者を中心としたバイアスとも言えるかもしれず、議論の余地がある論点です。本書の訳者、高橋洋さんのご苦勞を慮る所以です。

最後に「情動の社会性を追究することは、分断ではなく共生をもたらし、多文化共生社会で有効な方略を提案している」ことについて考えてみましょう。

研究を、現実社会のなかで検証する際には、その知見が社会のなかで有効な方法を提案するかどうか重要なポイントでもあります。文化心理学を研究していると言っていると、それは分断をもたらすのではないかと批判されることがあります。多くの戦争は文化による相違がもたらす衝突コンフリクトによって生じている、違いが明確になることによって争いが起こるのではないか、といった指摘です。「異なる情動を持つ」ことと仮定することは、人間性を疑うことになると考えているからだともスキータは断言しています。

違いを理解することは異文化・多文化理解の一步ですが、その際、私たちは暗黙のうちに、「価値」を含んだ理解をしてしまいがちです。「よい情動」「正しい行動」などを判断し、それによって情動の優劣をラベルづけしてしまいます。しかし、一人ひとりが持つ異なる経験から情動が生まれていることを理解すれば、情動には正誤ではなく異なるスタイルがあることがわかり、たとえばタンゴからワルツへとダンススタイルを変えていくことで（第7章参照）、異文化への適応が可能となることもわか

つてきます。

第7章で描かれた「情動の文化化（emotional acculturation）」の過程は、人間が主体的に文化に適応しようとし、別のダンスを踊る自分を受容することによって可能となることを説いています。そして、優劣なく複層的な情動プロセスを理解していくことが「情動リテラシー」となることを、第8章でまとめています。

経験は人によって異なり、それぞれが持つ情動はひとつの軸では判断できません。しかしながら、個人の経験軸によって情動は異なること、その軸は多様であると理解すれば、他者の情動を理解する能力、情動リテラシーは高まっていくはずで、パリ五輪の柔道金メダリスト、デイヨラ・ケルディヨロワ選手（ウズベキスタン）が二回戦で阿部詩選手あべしに勝利したときや、決勝戦で相手を破ったときには喜びを表さず敗者に尊敬を示して、表彰台で金メダルを受け取ったときによく笑顔を見せたことは、情動リテラシーの高い行動の一例と言えるでしょう。

*

ミシガン大学でバチャと私が初めて会ってからちょうど三〇年。感情研究の専門家でない私のナイーブで未熟な問いにも、彼女は耳を傾けてくれました。研究をはじめたとき、私は彼女に日本の能面こまね（小面）を贈りました。このマスクは、能の台本や役者の演技によって、いくつもの感情を表現できるということを伝えながら。当時、彼女は「率直な意見を言いきる」というオランダ人ならではの文

化的コンフリクトを、日本人の私は反対に「意見を言えない」コンフリクトを抱えていました。彼女と私は、アメリカでの異文化体験を共有し、カルチャーショックのなかにありながら、その経験を負の土産とせず、各々の文化的背景を見つめ直しながら、共同研究を重ねてきました。能面は今でも彼女のオフィスに鎮座しています。

文化と感情研究への挑戦を続けてきたバチャの集大成となる本書は、豊かな多文化共生社会の実現に資する一冊であると確信しております。

本書の日本語版刊行を見届けたら、私は（期せずして）この九月から、ルーヴェン・カトリック大学のサバティカルに入ります。バチャと私の、文化心理学の新たなステージでのダンスを楽しみにしています。

二〇二四年七月 唐澤真弓（東京女子大学・教授）

訳者あとがき

本書は *Between Us: How Cultures Create Emotions* (W. W. Norton & Company, 2022) の全訳である。

著者のバチャ・メスキータはオランダ生まれの社会心理学者であり、アムステルダム大学のニコ・フライダ教授のもとで情動研究を始め、イタリア、ボスニアでの生活を経てアメリカに移住し、ミシガン大学で博士研究員として文化心理学の研究を深めた。ノースカロライナ州にあるウェイク・フォレスト大学准教授を経て、現在はベルギーのルーヴェン・カトリック大学で教授を務めている。なお、著者の両親はナチスの迫害を受けており、巻末の註（はじめに1）によれば父親はアンネ・フランクの級友で、彼女の日記に言及されているという。

著者の研究対象は情動に対する文化や社会の影響で、文化心理学のバイオニアとして高く評価されており、『情動はこうしてつくられる——脳の隠れた働きと構成主義的情動理論』（紀伊國屋書店、二〇一九年）の著者リサ・フェルドマン・バレットとも親しく、彼女の情動に関する理論の影響を強く受けている。ただし、本書はバレットの本のように脳生理学や神経科学に基づくミクロな記述はなく、社会心理学的なマクロの視点からの記述が大半を占めており、自身の異文化体験にもとづく具体例も多いので読みやすい。

また、解説を寄せてくださった唐澤真弓氏（東京女子大学教授）をはじめとして、何人かの日本人研

究者とも共同研究をしており、本書にもその成果として日本人の事例がいくつか紹介されている。日本人の情動には欧米人から見ればわかりにくい一面があり、第3章に書かれている「甘え」についての記述を読めば、日本文化に対する欧米人からの視線の一例として読者もその特異さに気づかされるであろう。

本書の概要については、「はじめに」の後半（二三―一四頁）にまとめられているのでそちらを参照していただき、本稿では、いくつかの訳語について補足しておきたい。

前述のとおり、バレットの構成主義的情動理論で提起されている概念が本書でもいくつか使われているが、本書は、情動という現象をバレットほど細かな粒度りゅうどでとらえてはおらず、心理・社会レベルに絞られているため、それらの概念を厳密に把握していなくても十分に理解できるだろう。

たとえば情動 (emotion) と感情 (feeling) の区別は、バレットの本では独自の意味を持つが、本書では、「情動」は生理的な作用を指し、「感情」はその主観的な現われを指すという一般的な意味でとらえても的外れではないはずだ。

とはいえ、著者は内面の感情が情動の唯一の表現形態であるとは考えていない点に留意する必要がある。そう考えられているのはMINE型情動が流布している欧米社会においてであって、OURS型情動が流布している日本を含めた非欧米社会では情動は必ずしも内面の感情によって表現されるとは限らない (MINE型情動、OURS型情動については第2章を参照)。

概念とインスタンスもバレットが『情動はこうしてつくられる』で使っている言葉だが、本書にお

いては、第6章にあるように「(情動) 概念」は容器コンテナ、「インスタンス」はそれに収められる個々の具體的な内容 (一回ごとの情動の発露) ととらえればよいだろう。

また、情動エピソードも容器に収められる内容と見せるが、ただしエピソードとあるように、インスタンスのような個別的なものではなく、ストーリー性を帯びており、そのストーリーは文化ごとに異なる。これは、たとえば「怒り」の情動エピソードを説明した次の記述でよくわかる。「怒りには、道徳的なストーリーが織り込まれている。その怒りは正しいか、間違っているか？ 誰は怒ってもよくて、誰が怒ってはならないのか？ 標的となるのは誰か？ これらの文脈に合うストーリーはそれぞれ文化ごとに異なる」(本書一四〇頁)

ところで、訳者は本書を、移民問題への処方箋として高く評価したい。

著者の研究テーマのひとつに「移民の情動」があり、本書でも移民を対象にした数々の研究が紹介されている。また、著者自身がアメリカへ移住した当初にオランダ文化との違いに戸惑ったエピソードも第1章に描かれているように、十数年間の異文化経験がある。

昨今、欧米で移民問題が盛んに論じられている。大手メディアの記事では移民問題が「右傾化」という括りで捉えられているように読めるが、訳者はそれを疑問視しており、移民問題とはイデオロギイに関する問題ではないと考えている。

現在のヨーロッパでは、デンマークやスウェーデンなど、左派政権が移民を制限する方向に走り始めている。ここで「左派や中道でも移民制限に走るようになりつつあるからこそ、右傾化と言えるの

では？」と疑問に思われる人も多いのかもしれないが、そこに大きな落とし穴がある。「移民制限は本来右派がやるものだ」という前提そのものが誤っている、という可能性を見落としていないだろうか。

要するにこの疑問は、移民制限は右派がやるものと端から決めつけておいて、中道や左派も移民制限をやり始めたのだから「まさに右傾化が起こっているのだ」と見なし、それによって元来無意味な前提をさらに補強するという、同語反復、もしくは論点先取の誤謬の類にすぎない。

移民問題はイデオロギーに関するものではなく、「庶民の生活」に関するものと訳者はとらえている。ここで言う「庶民」とは、移民側と受け入れ側の双方を指す。庶民の生活が一定の限度を超えて損なわれていけば、思想信条など関係なく、人々のあいだで移民が「移民問題」としてクローズアップされるようになるのは当然のことであろう。欧米で現在起こっている現象は、まさにそこに起因する。

では、なぜ庶民の日常生活に影響が及ぶ問題が、移民と受け入れ側の住民のあいだで生じてしまうのだろうか？ その理由は本書を読めばよくわかるので、この点をもう少し詳しく見てみよう。

とりわけ邦題にあるように、「文化が情動をつくる」のであれば、受け入れ側の住民と、別の文化圏で育った移民のあいだでは、自己の情動の表現や他者の情動の知覚のありかたが大幅に異なりうる。そしてこの「情動の実践」方法が異なれば、相手を理解することも困難になり、そこに軋轢が生まれる。

本書にはその具体例が数多く紹介されているが、要点だけあげておこう。

自分の感情をどう理解するかは、自国の文化のもとで利用可能な情動概念によって決まる。情動概念は社会的なコミュニティーの内部で共有されている。私が利用できる情動概念は、情動的なストーリーを「描く」ための特定の方法を提供し、そこに書かれていない結末で終わることを困難にするのだ。(二二七頁)

特に最後の一文に注目されたい。自国の文化の情動的なストーリーに書かれていない結末でストーリーを締め括ることは困難であるという、この文化・社会・心理をめぐるジレンマが、移民問題の根底に存在するのだ。

では、どうすればこのジレンマを解決できるのか？ それについては著者が第7章と第8章で具体例とともに提案しているので、ぜひご自身で一読いただきたい。いずれ日本も移民問題のジレンマに直面せざるを得ないのだから、その心の準備を整えておくためにもきわめて有益な一冊である。

最後に、紀伊國屋書店と担当編集者の和泉仁士氏、いくつかの質問に回答してくださった著者バチヤ・メスキータ氏、および本書に度々登場し、解説をお寄せくださった唐澤真弓氏にお礼の言葉を述べたい。